

結婚と少子化

庄司弥生

1. 問題の所在

近年、晩婚化や少子化が深刻化している。2015 年の出生動向基本調査の結果によると、初婚年齢は男性で 30.7 歳、女性で 29.1 歳となっており、1987 年の調査から上昇が続いている。また、完結出生児数は 2010 年の調査に引き続き 2 人を下回り、希望子ども数も減少が続いている（国立社会保障・人口問題研究所 2016）。

結婚に対する考え方は人それぞれであってしかるべきだが、結婚が遅くなることにはやはりデメリットが多く存在するであろう。例えば、女性の出産適年齢は 22 歳程度と言われているが、女性の初婚年齢が今後さらに遅くなっていくと考えると出産率は低下していくと考えられる。少子化が進行し、人口が減少することによって、労働年齢人口が減少する事はもちろん、経済力の衰退、年金制度の崩壊、社会福祉制度への影響等、社会問題が発生することは自明である。

そこで、結婚するかどうかを規定する要因を分析することによって、結婚しない人が多い、あるいは結婚が遅くなる要因を解明し、結婚を早めるにあたって有効な手段を導きだそうと考えた。

先行研究では、未婚者は結婚したいにもかかわらず、経済的な理由や自由の優先等の理由で結婚を保留しているといった見解がみられる(桶川 2014)。また、石川(2007)は、男性は高学歴なほど、女性は正規労働者であるほど結婚と自分の人生との葛藤が強い傾向にあることを示しており、晩婚化は男女ともに、高学歴化による「個人主義的価値志向（石川 2007: 28）」が関係しているとも考えられる。

さらに、平成 27 年度版の厚生労働白書では、未婚者が結婚しない理由として「適当な相手とめぐり合わないこと（厚生労働省 2015: 8）」が挙げられていたが、これにはどんな異性を結婚に「適当な相手」とみなすかが関係してくると思った。つまり、結婚相手にふさわしいと思う基準が高いほど自分が良いと思う相手とは出会えないのである。そのため、今回の調査では、理想の結婚相手に関する問いを設け、未婚者と既婚者の結婚相手に対する理想にも着目した。

また、大学生等、若者の恋愛観・結婚観に焦点を当てている研究は多い(山本・西岡 2006; 石野・清水 2009)が、成年している既婚者と未婚者の結婚観を比較しているものはほぼないため、20～40 歳の男女を対象とする点は本稿の独自性となり、晩婚化の実態を観察するうえで有効となるだろう。

2. 仮説

本稿の目的は、結婚するか否かにどんな要因が影響を与えているかを明らかにすることにある。検証にあたって、以下のような仮説を立てた。

- ①大卒者は高卒者に比べ結婚しにくい
- ②収入満足度が高い人ほど結婚する
- ③結婚相手の理想が高い人ほど結婚しにくい
- ④正規雇用者の方が結婚しやすい

まず、①についてであるが、大卒者は高卒者に比べ、学業や仕事に集中したいがために結婚が後回しになるのではないかと考えられる。これは、女性において特に、仕事をしながら家庭を持ち子育てや育児を行うことが難しい現実が大きく影響すると考えられるため、女性において顕著な結果が予想されるだろう。

次に、②についてだが、先行研究でも明らかなように、結婚を踏みとどまる理由として経済的要因が大きいことが考えられる。経済的な指標には収入満足度を用いた。現在、結婚にかかる費用は平均約 600 万円（ブライダル総研 2016）、子供一人を大学まで育てるのにかかる費用は約 1640 万円（AIU 保険会社 2005）といわれている。男性においては特に、自分の生活をするので精一杯だと感じている人は、扶養する余裕がなく、結婚しようという気持ちになれないのが現実ではないだろうか。しかし、今までの男女役割分業的思考が薄くなっているとしたら、結婚することによって、居住費を折半したり、二人分の収入で生活をまかなったりしようとする人もいるかもしれない。

③については、問題の所在でも述べた通り、結婚していない人は結婚にふさわしい相手が見つからないことを結婚できない要因と考えている場合が多い。結婚相手に求める条件が高く、結婚してもよいと思える相手が見つかりにくい人ほど結婚しにくい傾向にあるのではないかと考えた。

最後の④は、正規雇用者は非正規雇用者に比べ、経済的にも精神的にも余裕があり、自分に自信を持っている可能性が高いことから考えた。実際、先行研究においても正規雇用者の方が結婚しやすいことが明らかになっている。しかし、女性も正規雇用で働く時代になっている今、女性の雇用形態と結婚の関係は注目に値するだろう。

3. データと方法

3. 1 データ

本稿で使用するデータは、2016 年 7 月に東北大学教育学部・教育学実習で実施した、「若年者のライフ・スタイルと意識に関する調査〈2〉」である。20～40 歳(学生は除く)の日本人男女 200 名を調査対象とし、郵送による調査を行った。計画サンプルサイズは 200 名、有効回収数は 145 名(回収率 72.5%)である。

3. 2 変数

①既婚・未婚(従属変数)

問 13「あなたは現在結婚していますか」より、既婚=1、未婚=0 のダミー変数を作成した。

②本人年齢

本稿では、同年代における既婚者と未婚者とを比較するために、年齢をある程度のグループに分類することにした。20～24 歳を「20 代前半」、25～29 歳を「20 代後半」、30～34 歳を「30 代前半」、35～39 歳を「30 代後半」に分類し、それぞれのグループにおいて既婚者と未婚者の特性を比較する。

③最終学歴

本人の最終学歴については、問 8「最後に卒業された学校について、あてはまるもの 1 つに○をつけてください」より、大卒(短大, 専修学校, 高専含む)=1、高卒=0 とする大卒ダミー変数を作成した。今回大学院の回答者はいなかった。

④収入満足度

問 10「自身の収入は生活していくうえでどのように考えていますか」より、1「余裕がある」=5 点, 2「適正である」=4 点, 3「どちらともいえない」=3 点, 4「やや少ない」=4 点, 5「とても少ない」=1 点のように得点換算し、収入満足度とした。

⑤結婚理想得点

既婚者に対しては、問 16 で「あなたが結婚する前に抱いていた結婚生活の考え方について、それぞれ当てはまるもの 1 つに○をつけてください」、未婚者に対しては、問 25 において、「結婚相手に求める条件について、それぞれあてはまるものに 1 つ○をつけてください」と質問している。「1 性格・価値観があう」、「2 人間として尊敬できる」、「3 勤務してい

る会社や収入が安定している」,「4 自分の仕事に対する理解がある」,「5 目標や夢がある」,「6 家事・育児に対する能力や姿勢がある」,「7 収入が高い」,「8 家庭第一である」,「9 自分を束縛しない」,「10 自分と年齢が釣り合う」,「11 身長や用紙が自分の好みである」,「12 きちんとした家柄である」,「13 学歴が高い」の 13 項目に対し,あてはまる=5 点,ややあてはまる=4 点,どちらともいえない=3 点,あまりあてはまらない=2 点,あてはまらない=1 点のように得点換算し,各項目の点数の合計値を「結婚理想得点」とした.また,各項目において未婚者の回答平均点と既婚者の回答平均点の差を分析に用いた.

⑥本人職業

本人の職業は正規社員か非正規社員であるかどうかが重要と考えられるため,問 2「現在のあなたについて,あてはまるもの 1 つに○をつけてください」より,「1 公務員・会社員・自営業」を 1,それ以外の「専業・兼業主婦(主夫),フリーター,無職」を 0 とする正規社員ダミー変数を作成した.

3. 3 分析方法

分析方法は,既婚ダミーを従属変数とする二項ロジスティック回帰分析を用いる.独立変数には,4 つの仮説をふまえた大卒ダミー,収入満足度,結婚理想得点,正規雇用ダミーに年齢グループを加えた計 5 つを利用する.年齢グループを加えたのは,単純に年齢の高い人ほど結婚しているかどうかを確認するためである.

4. 分析結果

4. 1 基礎分析

はじめに,今回の調査の基礎的なデータについて男女別に述べておく.

①既婚・未婚の割合および年齢

全体では 53.1%の人が既婚者である.男性において既婚者は全体の 37.5%,女性においては 62.9%であり,男性に比べ女性の方が既婚者の割合が高い.

②本人年齢

全体の平均年齢は,31.23 歳である.平均年齢は,男性は 32.45 歳,女性は 30.46 歳となっている.

③大卒ダミー

全体では大卒者は 44.8%である。大卒者の割合は、男性で 41.1%，女性で 47.2%であり，大卒者より非大卒者の方が少々多い。

③収入満足度

収入満足度は、全体平均が 2.47，男性平均が 2.55，女性平均が 2.42 となっており，男性の方がやや高い傾向にある。ちなみに，全体において 1「余裕がある」と回答した人の割合はわずか 3.5%であった。

④結婚理想得点

結婚理想得点は，全体で 47.84 点，男性で平均 44.65 点，女性で平均 49.83 点となった。女性の方が男性に比べ高い傾向にある。

⑥正規労働者ダミー

正規労働者の割合は，全体では 51.0%，男性で 69.6%，女性で 39.3%であった。

4. 2 既婚ダミーを従属変数とするロジスティック回帰分析

4. 1. 2 男性の結果と解釈

対象を男性に絞って分析した結果は以下のようになった。モデルの有意性は有意確率 0.01%で有意である。独立変数に着目すると，年齢が有意水準 1%，結婚理想得点が 10%水準で有意だった。男性は年齢が 1 歳上がると，既婚の確率が 1.291 倍になり，結婚理想得点が 1 点上がると，既婚の確率は 1.122 倍となることが分かった。しかし，大卒，収入満足度，正規労働者は有意な結果をもたらさなかった。年齢が高いほど既婚率が高くなるのは一般的理解からも納得できるが，結婚理想得点が高いほど結婚する傾向は予想とは反対の結果となった。

4. 2. 2 女性

続いて，女性を対象にした場合の結果である。女性の場合，独立変数は収入満足度，正規労働者ダミーが 1 %水準で有意，大卒ダミーが 5 %水準で有意となった。特に，大卒者は高卒者に比べ 4.673 倍既婚の確率が高いという結果が得られた。また，収入満足度は 1 上がると既婚の確率は 2.237 倍になる。一方，正規労働者は非正規労働者に比べ，既婚の可能性が 0.038 倍という結果になったが，これは結婚して働いていない，もしくは退職したことが多いことを示しているとも考えられる。

年齢，結婚理想得点については有意な結果が得られなかったため，その影響があるとはい

えない結果となった。

表1 ロジスティック回帰分析の結果(男性)

	B	標準偏差	Wald	df	有意確率	Exp (B)
年齢	0.256	0.082	9.791	1	0.002	1.291
大卒ダミー	1.041	0.78	1.782	1	0.182	2.833
収入満足度	0.387	0.343	1.272	1	0.259	1.473
結婚理想得点	0.115	0.066	3.01	1	0.083	1.122
正規労働者ダミー	0.619	0.929	0.444	1	0.505	1.858
定数	-16.123	4.921	10.735	1	0.001	0

表2 ロジスティック回帰分析の結果(女性)

	B	標準偏差	Wald	df	有意確率	Exp (B)
年齢	-0.034	0.066	0.26	1	0.61	0.967
大卒ダミー	1.542	0.657	5.515	1	0.019	4.673
収入満足度	0.805	0.296	7.41	1	0.006	2.237
結婚理想得点	-0.033	0.044	0.576	1	0.448	0.967
正規労働者ダミー	-3.263	0.774	17.767	1	0	0.038
定数	2.215	3.078	0.518	1	0.472	9.161

4. 2. 3 全体

対象を全体にして分析した結果は以下の通りである。正規労働者ダミーは 0.1%水準、大卒ダミー、収入満足度、は 1%水準、年齢、結婚理想得点は 10%水準ですべて有意な結果が得られた。正規労働者は非正規労働者に比べ 0.169 倍結婚しにくく、仮定とは反対の結果が得られた。大卒ダミーについては、大卒者は高卒者に比べ 3.169 倍結婚する傾向にあるということが明らかになった。これは仮定とは班値の結果だが、大卒者は賃金が高い傾向にあるため、経済的余裕から結婚に至る帆とが多いことを示しているのかもしれない。収入満足度は、1 点上がると結婚する確率が 1.182 倍になるが、これについては結婚している人の方が結婚していない人に比べ、経済的に余裕があるという因果が考えられるため、留意しなければならない。年齢は 1 歳上がると結婚する確率は 1.077 倍、結婚理想得点は 1 点上がると 1.055 倍になるというわずかな正の結果が得られた。

表3 ロジスティック回帰分析の結果(全体)

	B	標準偏差	Wald	df	有意確率	Exp (B)
年齢	0.074	0.041	3.251	1	0.071	1.077
大卒ダミー	1.153	0.413	7.788	1	0.005	3.169
収入満足度	0.594	0.193	9.49	1	0.002	1.182
結婚理想得点	0.054	0.028	3.733	1	0.053	1.055
正規労働者ダミー	-1.776	0.464	14.654	1	0	0.169
定数	-5.741	2.017	8.103	1	0.004	0.003

5. 結論

仮説を検証した結果を以下に整理してみる。

- ①大卒者は高卒者に比べ結婚しにくい→不支持
- ②収入満足度が高い人ほど結婚する→支持
- ③結婚相手の理想が高い人ほど結婚しにくい→不支持
- ⑤正規雇用者の方が結婚しやすい→不支持

分析の結果、ほとんどの独立変数は結婚するかどうかに対して有意な影響をもたらすことが明らかになったが、②以外については仮説と反対の結果が得られた。また、男女で分けて分析した結果では、男性は結婚理想得点しか有意な結果が得られなかった一方、女性は結婚理想得点以外の変数について有意な結果が得られるという違いが生じた。男性と全体において仮説③が支持されなかったのは、想定していなかった結果であった。仮説①が全体と女性の分析において支持されなかったことは、女性の場合、大卒者は高卒者に比べ大卒の男性と出会う可能性が高く、収入の高い男性と恋愛をすることになると経済的余裕があるため結婚に踏み切りやすいといったことは考えられるだろう。仮説④については、おそらく女性の結果が大きく影響しており(実際男性では有意な結果は得られていない)、結婚して離職したか無職、パート勤務の状態にある女性が多いことが影響しただろう。

以上より、大卒者、収入満足度が高い人、結婚相手に求める理想が高い人、非正規労働者が結婚しやすい傾向にあることが明らかになった。特に、コントロール可能な変数としては大卒かどうか結婚に影響を与え、またそこから発展して経済的余裕が結婚を左右することが考えられる。

単に大卒者を増やせば結婚につながるというわけではないだろうが、結婚や出産が遅くなってしまうことも考えられるため、やはり、大卒で高い給料を得なくては簡単に結婚できない状態を改善することには意味があるだろう。例えば、出産にかかる費用を行政が補助する、世帯を持つことになった場合に生活費や子育て費用に充てる補助金を支給するといった手助けが必要になってくる。結果としてそれが少子化を緩和し、労働人口が増加すればその費用はあとから還ってくるのであるから、社会的メリットが得られるのではない

だろうか.

最後に、今回の調査の限界点として、データサイズが小さく、サンプルに偏りが生じたことが挙げられる. もっと多くのデータを得られていれば、より正確な分析結果を得ることができた. さらに、質問紙の不備もいくつかあり、改善の余地はある. 特にサンプルサイズの問題は今後の課題といえよう.

【文献】

AIU 保険会社, 2005, 『現代子育て経済考 2005 年度版』 AIU 保険会社.

ブライダル総研, 2016, 「ゼクシィ結婚トレンド調査 2016」, ブライダル総研ホームページ (2016 年 12 月 11 日取得, http://bridal-souken.net/data/trend2016/XY_MT16_release_00zenkoku.pdf)

石川基樹, 2007, 「結婚・家族に関する価値意識と少子化」『人間科学研究』 20(2):27-36.

国立社会保障・人口問題研究所, 2016, 「第 15 回出生動向基本調査概要」, 国立社会保障・人口問題研究所ホームページ, (2016 年 12 月 11 日取得, http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/gaiyou15html/NFS15G_html06.html#h3%202-1-1)

厚生労働省, 2015, 『厚生労働白書』 ぎょうせい.

桶川泰, 2014, 「『恋愛意欲』『結婚意欲』が高いのは誰か異性との交際意欲が低いのは誰か」『追手門学院大学社会学部紀要』 (8):1-12.

桶川泰, 2014, 「『恋愛意欲』『結婚意欲』が高いのは誰か異性との交際意欲が低いのは誰か」『追手門学院大学社会学部紀要』 (8):1-12.

山本桂子・西岡正子, 2006, 「大学生(通信教育過程)の職業観と結婚観——ジェンダーの視点からの研究——」『キャリア教育研究』 24(1):21-31.